民法

案草

證據編

1267

114
A 26.1

正誤

六丁	裏二行目	四ハ	二ハ
十七丁	裏十一行目	又ノ下	ハヲ脫ス
二十七丁	裏十三行目	一ハ	二サ
二十九丁	裏十一行目	タハ	
三十二丁	裏一行目	動物ノ物ハ	產

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

民法(草案)目錄

證據論

第一部　證據
總則　自第一條至第九十一條
第一章　判事ノ考覈　自第一條至第五條
第一節　當事者申述ノ聽取、係爭物並ニ證書外ノ書類ノ調査及ヒ法律ノ解釋　自第六條至第十一條
第二節　臨檢　自第七條至第九條
第三節　鑑定　第十條
第二章　直接證據　第十一條
第一節　私書　自第十二條至第十七條
第一款、私署證書　自第十七條至第三十三條
自第三十四條至第三十六條

第二款　署名、捺印セサル證書　自第三十一條至第三十六條
第二節　口頭自白　自第三十七條至第四十九條
第一款　裁判上ノ自白　自第三十八條至第四十五條
第二款　裁判外ノ自白　自第四十六條至第四十九條
第三節　公正證書　自第五十條至第五十三條
第四節　反對證書　自第五十四條至第五十六條
第五節　追認證書　自第五十七條至第五十九條
第六節　證書ノ寫　自第六十條至第六十三條
第七節　證人ノ陳述　自第六十四條至第七十六條
第八節　世評　第七十七條
第三章　間接證據　自第七十八條至第九十一條
第一節　法律上ノ推定　自第七十八條至第七十九條
第一款　公益ニ關スル完全ナル法律上ノ推定　自第七十八條至第八十八條
第二款　私益ニ關スル完全ナル法律上ノ推定　第八十九條
第三款　單純ナル法律上ノ推定　第九十條
第二節　事實ノ推定　第九十一條
第二部　時効
第一章　時効ノ性質及ヒ適用　自第九十二條至第百六十六條
第二章　時効ノ抛棄　自第百六十七條至第百九十二條
第三章　時効ノ中斷　自第百九十三條至第百二十六條
第四章　時効ノ停止　自第百二十七條至第百三十九條
第五章　不動産ノ取得時効　自第百四十條至第百四十六條
第六章　動産ノ取得時効　自第百四十七條至第百五十二條

第七章　免責時効　自第百五十三條至第百五十六條
第八章　特別ノ時効　自第百五十七條至第百六十條

證據編

第一部　證據

總則

第一條　有的又ハ無的ノ事實ヨリ利益ヲ得ンカ爲メ裁判上ニテ之ヲ主張スル者ハ此事實ヲ證スルヿヲ要ス

相手方ハ亦自巳ニ對シテ證セラレタル事實ノ反對ヲ證シ或ハ此事實ノ効力ヲ滅却セシムル事實トシテ主張スルモノヲ證スルヿヲ要ス

第二條　自巳ノ主張ノ全部又ハ一分ヲ法律ニ從ヒテ證セス又ハ判事カ證據ヲ査定スルノ權ノ自由ナル場合ニ於テ判事ニ此主張ノ心證ヲ起サシメサリシ原告若クハ被告ハ其證セサリシ點ニ付キ請求又ハ抗辯ニ於テ敗訴ス

第三條　當事者ノ一方ハ或ル事實ノ證據カ將來已レノ爲メニ利益アルトキハ其利益ト證據喪失ノ危險トヲ疏明シテ訴訟ノ起ラサル前ト雖モ其事實ノ證據ヲ擧クルヿヲ裁判上主トシテ請求スルヿヲ得

第四條　下ニ定メタル規則ハ物權、人權及ヒ人ノ身分ニ關スル證據ニ共通ノモノトス但特別ノ規定ヲ妨ケス

第五條　證據ハ左ノ諸件ヨリ成ル

第一　判事ノ考覈

第二　直接證據

第三　間接證據

第一章　判事ノ考覈

第六條　判事ハ左ノ諸件ニ依リ主張セラレタル事實ノ確實ヲ得タルトキハ自已ノ考覈ニ依リテ爭ヲ決スルヿヲ得

第一　當事者又ハ其代人ノ申述ノ聽取、係爭物幷ニ證書外ノ書類ノ調査及ヒ法律ノ解釋

第二　臨檢

第三　鑑定

第一節　當事者申述ノ聽取、係爭物幷ニ證書外ノ書類ノ調査及ヒ法律ノ解釋

第七條　當事者ノ自白アル場合ノ外當事者又ハ其代人ノ申述及ヒ說明ヨリ請求若クハ抗辯ノ證セラレサルヿ又ハ尙ホ早キヿノ顯ハルヽニ於テハ判事ハ其請求若クハ抗辯ヲ棄却シ又ハ他日本案ノ判決ヲ爲ス可キ旨ヲ言渡ス

右判事ノ心證カ係爭物及ヒ證書外ノ書類ノ調査ヨリ生スルトキモ亦同シ

第八條　受ケタル損害若クハ失ヒタル利益其他原因ニ爭ナク

供給ス可キ價額ニ付キ爲ス可キ評價ノミニ爭ノ存スル場合ニ於テ判事ハ當事者又ハ其代人ノ陳述ヲ聽キ此評價ニ必要ナル元素ヲ得タルトキハ自ラ其評價ヲ爲スヿヲ得

第九條　事實ニ爭ナク法律ノ點ノミニ爭ノ存スルトキハ判事ハ當事者又ハ其代人ノ陳述ヲ聽キ法律ノ規定ヲ其精神ト明文トニ依リテ解釋シ且條理ト公道トノ普通原則ニ依リテ之ヲ補完シ自己ノ心證ヲ取ル

第二節　臨檢

第十條　境界、地役、占有、財産ノ損害及ヒ不動産工事ノ執行ニ關スル爭其他此ニ類似ノ爭ニ付テハ勿論裁判所ニ移送スルヿヲ得サル動産ノ形狀ヲ證スルニ關スルトキト雖モ判事ハ主張セラレタル事實ヲ直接ニ知ルヿヲ以テ訴訟事件ヲ明カナラシムルニ必要ナリト思考スルトキハ或ハ職權ヲ以テ或ハ當事者ノ申立ニ因リテ係爭物又ハ爭ヲ決定ス可キ元素ノ存在スル場所ニ臨檢スルヿヲ得

第三節　鑑定

第十一條　法律ニ於テ鑑定ニ依ル可キ旨ヲ定メタル場合ノ外判事ハ爭ノ判決ニ付キ特別ノ知識ヲ要スルトキハ何時ニテモ或ハ職權ヲ以テ或ハ當事者ノ申立ニ因リテ自己ノ考覈ヲ助ケシムル爲メ鑑定人ノ報告ヲ爲ス可キ旨ヲ命スルヿヲ得

判事ハ鑑定人總員一致ノ說ト雖モ之ニ從フノ義務ナシ

第二章　直接證據

第十二條　左ノ諸件ニ於テハ人ノ證言ヨリ生スル直接ノ證據アリトス

第一　私書

第二　口頭自白

第三　公正證書

第四　證人ノ陳述

第一節　私書

第十三條　私書ノ證據力ハ其私書ノ對抗ヲ受クル當事者ノ之ニ署名シ又ハ捺印シタルト否トニ從ヒテ輕重アリ

第一欵　私署證書

第十四條　私署證書ハ之ヲ以テ對抗セラルヽ者ニ不利ナル事實ノ陳述又ハ追認ヲ記載シ且其署名及ヒ印章又ハ其一アルトキハ署名、捺印者ノ裁判外ノ自白即チ證言ヲ成スモノトス

右同一ノ條件ヲ有スル書狀ハ私署證書ト同一ノ證據力ヲ有ス

第十五條　自己ノ利益ニ於テ私署證書ヲ有スル者ハ爭ノ生スル前ト雖モ其署名者ナリト主張シ又ハ思考スル者ニ對シテ手跡、署名及ヒ印章ノ追認ヲ請求スルヿヲ得

署名者ナリト主張セラレタル者ハ或ハ合併シテ或ハ各別ニ其手跡、署名又ハ印章ノ眞正ナルヿヲ明確ニ追認シ又ハ否認スルヿヲ得ルノミ

裁判所ヨリ本條ノ規定ノ口諭ヲ受ケタル者否認ヲ爲サヽルトキハ裁判所ハ其否認セサルモノニ付テハ之ヲ追認シタリト認定スルヿヲ得

第十六條　印章ニ關シテハ其印章ヲ提示セラレタル者ハ其印章ノ自己ノ印章ニ相違ナキヿヲ追認スルモ押捺ハ自身又ハ自己ノ許諾ニテ之ヲ爲シタルヲ否認スルヿヲ得但總テノ方法ヲ以テ其證據ヲ供スルヿヲ要ス

其追認證書ヲ與フル前ニ右ノ異議ヲ留メサリシトキハ其後ニ至リ右ノ抗辯ヲ利唱スルヿヲ得ス

又其署名又ハ印章ヲ追認シタルトキハ其署名又ハ印章ノ得ラレシ手段タル強暴、錯誤又ハ詐欺ヲ最早主張スルヿヲ得ス但強暴カ既ニ止ミ又ハ錯誤若クハ詐欺ヲ既ニ發見シ且此事ニ付キ何等ノ異議ヲモ留メサリシトキニ限ル

異議ヲ留メタルトキハ追認證書ニ之ヲ記ス可シ

第十七條　署名者ナリト主張セラレタル者ノ相續人、承繼人又ハ代人ニ對シテ追認ノ請求アリタルトキハ被告ハ或ハ自已ノ代表スル者ノ署名若クハ印章ヲ知ラサル旨或ハ其使用ノ不確實ナル旨ヲ陳述スルニ止マルヿヲ得

右ノ相續人、承繼人又ハ代人ハ印章ノ不正當ナル押捺又ハ承諾ノ瑕疵ヨリ生スル無効ノ方法ヲ利唱スルノ權利ヲ失ハス

但此事ニ關シ異議ヲ留ムルヿヲ怠リタルトキト雖モ亦同シ

第十八條　被告ハ異議ヲ留メスシテ署名又ハ印章ヲ追認シタリト雖モ後ニ捺印白紙ノ濫用又ハ署名若クハ印章ノ僞造アリタルヿヲ證スルノ權利ヲ失ハス

然レモ捺印白紙ノ濫用ニ付キ異議ヲ留メスシテ追認アリタルトキハ之ヲ知リ其證書ニ依リ善意ニテ約定シタル第三者ニ證書無効ノ方法トシテ此濫用ヲ以テ對抗スルヿヲ得ス

第十九條　一人又ハ數人ノ證人カ私署證書ニ加署シ又ハ加印シタルトキ其證人ヲ手跡驗眞ニ召喚スルヿヲ得ルニ於テハ之ヲ召喚ス可シ

第二十條　手跡、印章又ハ署名ノ驗眞ノ請求ニ關スル方式幷ニ期間及ヒ被告又ハ其代人ノ出席セサルニ因リ此等ノ者ニ於テ印章又ハ署名ヲ追認シタリト爲スヿヲ得ヘキ場合ハ民事訴訟法ニ於テ之ヲ定ム

署名者ナリト主張セラレタル者ノ明確ニ否認シ又ハ其相續

人若クハ承繼人ノ追認ヲ爲サヽル場合ニ於ケル手跡驗眞手續ノ規則ニ付テモ亦同シ

第二十一條　雙務契約ヲ證スル私署證書ハ反對ノ利益ヲ有スル主タル當事者ノ員數ニ應スル正本ヲ作リ且之ニ署名又ハ捺印スル「ヲ要ス

又各正本ニハ其作リタル正本ノ數ヲ附記スル「ヲ要ス

然レ𪜈當事者ハ一通ノミノ證書ヲ作ル「ヲ得但其證書中指定シタル第三者ノ方ニ之ヲ寄託スル「ヲ合意シタル𪜈ニ限ル

右ノ場合ニ於テ第三者ハ各當事者ノ求ニ應シテ其證書ヲ示サヽル可カラス但總當事者ノ承諾ナクシテ之ヲ交付スル「ヲ得ス

第二十二條　正本數通ノ證書ノ錄製及ヒ其數ノ附記又ハ證書ノ寄託ハ當事者カ合意ノ組成ヲ繫カラシメタル條件ト看做ス

然レ𪜈前條ニ從ヒテ證書ノ錄製アラサリシ契約ノ全部又ハ一分ヲ履行シタル當事者ハ最早條件ノ不履行ヲ利唱スル「ヲ得ス

第二十三條　片務契約ヲ證スル私署證書ニ金錢其他ノ定量物ヲ與ヘ辨濟シ又ハ返還スルノ諾約ヲ包有スル場合ニ於テ債務者又ハ其代人カ證書ノ本文ヲ自書セサル𪜈ハ債務者ハ其署名若クハ捺印ノ外ニ自筆ニテ金額若クハ數量ヲ記載シ又ハ金額若クハ數量ノ文字ニ捺印スル「ヲ要ス

若シ連帶ナルト否トヲ問ハス數人ノ債務者アル𪜈ハ其中ノ一人右ノ方式ニ從フヲ以テ足レリトス

第二十四條　數通ノ正本及ヒ第二十三條ノ方式ハ商人ニ付テ

ハ之ヲ要セス

第四十五條　前數條ノ方式ニ從ヒ錄製シタル私署證書ニシテ其對抗ヲ受クル者ノ追認シ又ハ裁判上ニテ其者カ追認シタリト爲シタルモノハ其主文及ヒ之ト直接ノ關係ヲ有シ又ハ之ヲ補完スル文言ニ付テハ其者ニ對シテ完全ナル證據トス」此他ノ文言ハ書面ニ因ル證據端緒ノミニ之ヲ用ユル「ヲ得」

第四十五條ニ記載シタル自白不可分ナル原則ハ同條ノ區別ヲ以テ證書ノ各部分ニ之ヲ適用ス

第二十六條　證書カ第十八條ニ規定シタル如ク捺印白紙ノ濫用又ハ僞造ノ攻擊ヲ受ケタルトキハ其證據力ハ刑事裁判所ニ被告ノ送致アルニ因リテ停止セラレ其裁判所ノ判決ノ確定ト爲ルマテ民事ノ判決ヲ中止ス

嫌疑アル人ノ死亡其他ノ原因ニ由リテ刑事審問ノ開カレサリシトキハ民事裁判所ハ主張セラレタル犯罪ヨリ生スル不受理ノ理由ニ付キ裁判アルマテ本案ノ判決ヲ中止ス

又刑事審問中ナルトキハ民事裁判所ハ當事者ノ要求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其判決ヲ中止スル「ヲ得

第二十七條　私署證書ハ其證書ヨリ後ニ當事者ト約定シタル特定承權人ノ利害ニ於テ當事者間ニ於ケルト同一ノ證據ヲ爲スモノトス然レトモ其日附ハ確定ナルトキニ非サレハ之ヲ援用スル「ヲ得ス

第二十八條　私署證書ハ左ノ諸件ニ因リテ確定日附ヲ取得ス

第一　登錄

第二　財產ノ封印若クハ目錄ノ調書其他ノ公正證書又ハ確定日附ヲ有スル他ノ私署證書ニ於ケル記載

第三　手署シタル當事者中一人又ハ加署若クハ加印シタ

ル證人ノ死亡又ハ此等ノ者ノ失踪ニ關スル裁判上ノ宣告

右ノ場合ニ於テ證書ハ登錄、記載、死亡又ハ最後ノ音信ノ日ヨリ確定日附ヲ有スルモノトス

第二十九條　一箇ノ證書ヲ他ノ證書ニ附記シタル場合ニ於テ二箇ノ證書ヲ以テ設定シタル權利カ幷存ス可カラサルモノナルトキハ優先ハ先キニ成立シタルモノトシテ記載セラレタル權利ニ屬ス

二箇ノ證書カ同時ニ確定日附ヲ有スル其他ノ場合ニ於テハ優先ハ物ノ占有ニ因リテ維持セラレタル證書ニ屬シ又占有ヲ失サルトキハ最初ニ裁判上ノ請求ノ用ニ供セラレタル證書ニ屬ス

二箇ノ證書何レニモ確定日附ヲ有セサルトキハ優先ハ同一ノ區別ヲ以テ之ヲ規定ス

然レトモ如何ナル場合ニ於テモ當事者ニシテ其自白ニ因リ約定シタル當時ニ於テ確定日附ヲ有セサルモ自己ノ證書ト幷存セサル證書タルヿノ證セラレタル者ハ優先權ヲ失フ

第三十條　受取證書又ハ免責若クハ相殺ノ證書ハ確定日附ヲ有セスト雖モ其日附ヲ以前ノ日附ニ爲サレタリト思考ス可カラサルニ於テハ之ヲ以テ債權ノ讓受人、被代位人及ヒ差押債權者ニ對抗スルヿヲ得

商事ニ於テハ私署證書ノ日附ハ眞誠ノモノト推定ス但錯誤又ハ詐欺ヲ證スルハ此限ニ在ラス

第二欵　署名、捺印セサル證書

第三十一條　商人ノ帳簿ハ總テノ人ノ爲メ其商人ニ對シテ證ヲ爲ス然レトモ其帳簿ヲ援用スル者ハ此ヨリ生スル自白ヲ分

ツヿヲ得ス

此他右帳簿ノ證據力ハ商法ニ於テ之ヲ規定ス

第三十二條　非商人ノ帳簿、覺書及ヒ家内ノ書類ハ其者ノ爲メ證據ヲ爲サス

右ノ帳簿、覺書及ヒ家内ノ書類ハ其者ニ對シ下ノ區別ニ從ヒテ證據ヲ爲ス

第三十三條　債權者ノ書面ハ左ノ場合ニ於テハ其債權者ニ對シテ證據ヲ爲ス

第一　債務者ノ辨濟其他ノ免責ヲ明カニ揭クルヿ但債權者ニ於テ債務者ニ交付スル爲メ準備セル受取證書タルヿヲ證スルヿハ此限ニ在ラス

第二　債務者ノ證書又ハ從來ノ受取證書ニ免責ヲ書込ミ且其書類カ債務者ノ手ニ存スルヿ

第三十四條　債務者ノ書面ニ其義務ヲ揭ケ且之ヲ以テ債權者ノ證書ノ用ニ供スルモノタルヿヲ記載スルヿハ其書面ハ債務者ニ對シテ證據ヲ爲ス

第三十五條　前二條ノ場合ニ於テ抹殺シタル書面ハ之ヲ斟酌セス但其抹殺カ詐害又ハ錯誤ニ出テタルヿヲ證セラルヽヿハ此限ニ在ラス

第三十六條　非商人ハ裁判上ニテ其家内ノ帳簿及ヒ書類ヲ差出タスノ義務ナシ然レトモ任意ニテ之ヲ差出タシタルヿハ爭ニ關スルモノヲ抄錄シタル後ニ非サレハ之ヲ取戻スヿヲ得ス

第二節　口頭自白

第三十七條　口頭自白ハ一方ノ當事者カ己レニ不利ナル權利上ノ結果ヲ生スルヿ有ル可キ事實ニ付キ爲スモノナリ其自

白ハ裁判上ノモノ有リ裁判外ノモノ有リ

第一欵　裁判上ノ自白

第三十八條　裁判上ノ自白ハ自發ノモノ有リ又ハ民事訴訟法ニ規定シタル本人訊問ニ因リテ爲スモノ有リ

第三十九條　自白ハ其自白ニ繫カル權利ヲ處分スルノ能力ヲ有スル者ニ非サレハ有効ニ之ヲ爲スヿヲ得ス但法律上自白ノ證據ヲ禁シタル事實ニ非サルトキニ限ル

代理人ノ爲シタル自白ハ其管理所爲ニ關スルノ外特別ノ委任ニ依リタルトキニ非サレハ有効ナラス但裁判上ノ代人ノ自白ト其陳述取消ノ方式及ヒ條件トニ關スル民事訴訟法ノ規定ヲ妨ケス

第四十條　前條ニ從ヒテ爲シタル自白ヲ相手方ノ受諾シ又ハ其證書ヲ裁判所ヨリ與ヘタルトキハ其自白ハ之ヲ爲シタル者ニ對シテ完全ノ證據ヲ爲ス

然レトモ其自白ハ事實ノ錯誤ノ爲メニ之ヲ言消スヿヲ得

第四十一條　自白ハ法律ノ錯誤ノ爲メ之ヲ言消スヿヲ得ス

然レトモ相手方ノ權利ノ直接又ハ間接ノ追認ハ之ヲ爲シタル者ヲシテ其權利ノ原因及ヒ存續ヲ爭フノ權能ヲ失ハシメス

第四十二條　複雜ナル自白ヲ援用セント欲スル者ハ陳述セラレタル數箇ノ事實ニ關シ其自白ヲ分ツヿヲ得ス但此等ノ實カ相牽連スルヿヲ要ス

然レトモ主タル事實ヲ變更スル事實ノ主張ハ通常ノ證據方法ヲ以テ之ヲ駁擊スルヿヲ得

第四十三條　裁判上ノ自白ノ効力ハ裁判所ノ管轄違カ公ノ秩序ニ關セサルモノタルトキハ其管轄違ニ因リテ無効ト爲ラス」

反對ノ場合ニ於テハ自白ハ裁判外ノ者トシテノミ有効ナリ

第四十四條　一方ノ當事者カ訴訟事件ノ或ル事實ノ成立ニ付キ陳述ス可キノ求ヲ受ケテ其事實ヲ爭ハサルニ因リ之ヲ追認シタリト看做ス場合ハ民事訴訟法ニ於テ之ヲ規定ス

第四十五條　一方ノ當事者カ癈疾其他ノ原因ニ由リテ語ルヿヲ得スト雖モ書面又ハ容態ヲ以テ裁判所ニ答フルヿヲ得ルニ於テハ裁判上ノ自白ノ規則ヲ之ニ適用ス

第二欵　裁判外ノ自白

第四十六條　裁判外ノ自白ハ相手方又ハ其代人ノ面前ニ於テ口頭ニテ又ハ此等ノ者ニ送致シ若クハ交付シタル信書若クハ書類ニテ之ヲ爲シタルニ非サレハ其効ヲ有セス

此末ノ場合ノ外口頭ノ自白ヲ受ケ及ヒ證スルノ資格ヲ有スル官廳ニ於テ其自白ヲ爲サヽリシトキハ人證ヲ許ス場合ニ非サレハ證人ヲ以テ之ヲ證スルヿヲ得ス

第四十七條　裁判上ノ自白ノ有効ナル爲メ要スル能力、其證據力、其言消及ヒ其不可分ニ關スル前數條ノ規定ハ裁判外ノ自白ニ之ヲ適用ス

然レトモ判事ハ確實ニシテ明白ナル自白ニ非サレハ之ヲ採用スルヿヲ得ス

第四十八條　前記ノ規定ハ義務ノ全部又ハ一分ノ履行ヲ法律上ニテ默示ノ自白ト看做ス可キ場合ヲ妨ケス

第四十九條　裁判外ノ自白ハ有効ニ之ヲ言消シタリト雖モ相手方ノ利益ニ於テ時効ノ中斷ヲ生ス然レトモ時効ハ言消ノ日ヨリ再ヒ進行ス

第三節　公正證書

第五十條　公正證書ハ公吏カ當事者ヨリ證スルヿヲ託セラレタル事實ニ付テノ證言ナリ

又國又ハ官廳ノ代人トシテ事ヲ行フ官吏ノ錄製シタル證書ハ公正ナリ

證書ハ公吏カ場所、證書ノ性質及ヒ其證書ニ關係スル人ニ付キ管轄ヲ有シ且一時無能力ノ形狀ニ在ラスシテ法律ニ定メタル方式ニ從ヒテ之ヲ作リタルニ非サレハ公正ナラス

公證人其他當事者ノ囑託ニ應ス可キ公吏ノ管轄及ヒ其證書ノ方式ハ特別法及ヒ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第五十一條　前條ニ從ヒテ作リタル證書ハ僞造ノ申立アルマテハ公吏自身ニテ又ハ其面前ニテ爲シタル行爲及ヒ申述ニ付キ其吏員ノ陳述ノ證據ヲ爲ス

此證書ハ之ニ記載シタル日附ニ付キ右同一ノ證據ヲ爲ス

公吏ノ名ニテ作リ且其署名及ヒ印章ヲ具ヘタル證書ハ僞造ノ申立アルマテハ其吏員ヨリ出テタルモノト推定ス

僞造申立手續ハ民事訴訟法ニ於テ之ヲ規定ス

第五十二條　公正證書ノ證據力ハ僞造ノ申立ニ因リテ之ヲ停止ス

主文ト直接又ハ間接ノ關係アル文言ニ關シテハ第二十五條ノ規定ヲ適用ス

第五十三條　證書ニ公正證書トシテ有効ナル爲メ上ニ定メタル條件ノ一ヲ缺クヿアルモ各當事者カ現實ニ之ニ署名シ又ハ捺印シタルトキハ其證書ハ第二十一條及ヒ第二十三條ニ定メタル條件ヲ履行セスト雖モ私署證書トシテ有効ナリ

第四節　反對證書

第五十四條　當事者ハ秘密ニ存シ置ク可キ反對證書ヲ以テ公正證書又ハ私署證書ノ効力ノ全部又ハ一分ヲ變更シ又ハ滅却スルヿヲ得然レトモ其反對證書ハ公正證書又ハ確定日附ヲ

有スル私署證書タルヿト雖モ署名者及ヒ其相續人ニ對スル
ニ非サレハ効力ヲ有セス
然レトモ各當事者ノ債權者及ヒ特定名義ノ承繼人カ當事者ト
約定スルニ當リ反對證書アルヲ知リタルヿヲ證スルニ於テ
ハ之ヲ以テ其債權者及ヒ承繼人ニ對抗スルヿヲ得

第五十五條　不動產權利ニ關スル反對證書カ或ハ登記、記入ニ
因リ或ハ其緣邊附記ニ因リテ公ニ爲サレタルヿハ其反對證
書ハ通常證書ノ効力ヲ取得ス

第五十六條　孰レノ場合ニ於テモ各當事者ノ總テノ承繼人ハ
他ノ當事者及ヒ其相續人ニ反對證書ヲ以テ對抗スルヿヲ得

第五節　追認證書

第五十七條　追認證書ハ當事者ノ一方カ已レニ不利ナル公正
又ハ私署ノ原證書ノ成立ヲ追認スルノ證書ナリ

右ノ證書ハ債權者ナシテ其原證書ヲ差出タスノ義務ヲ免カ
レシメス又其證書中ニ原證書ヨリ更ニ多ク又ハ更ニ少キ事
項ヲ記シ又ハ之ト異ナリタル事項ヲ記スルモノハ其効ナシ

第五十八條　然レトモ左ノ三箇ノ場合ニ於テハ追認證書ハ原證
書ニ代ハルモノトス

第一　追認證書ニ原證書ノ事項ヲ再揭シタル旨ヲ記載スルヿ

第二　追認證書ニ之ヲ原證書ニ代用ス可キ旨ヲ明示スルヿ

第三　追認證書ノ日附ヨリ二十个年ヲ經過シ且債權者カ
其證書ノミヲ既ニ權利ノ行使ニ用ヰタルヿ

第五十九條　前記ノ場合ノ外債權者カ原證書ヲ差出タスヿヲ
得サルヿハ追認證書ハ其利益ニ於テハ書面ニ因ル證據端緒

トシテ有効ナリ

總テノ場合ニ於テ追認證書ハ時効ヲ中斷ス

第六節　證書ノ寫

第六十條　證書ノ寫ハ之ヲ援用スル者ヲシテ其正本ヲ差出タスノ義務ヲ免カレシメス但其者カ正本ノ滅失ヲ證シタルキハ此限ニ在ラス

公正ノ正本又ハ裁判上追認アリタル私署ノ正本カ公吏ノ原本中ニ藏メラレタルキハ裁判所ニ其正本ヲ差出タスヿハ民事訴訟法及ヒ公吏ノ規則ニ從ヒテ之ヲ爲ス

第六十一條　正本ノ滅失シタルキ其寫ハ左ノ四箇ノ場合ニ於テハ正本ト同一ノ證據力ヲ有ス

第一　公吏ノ作リシ公正證書ノ正式謄本タルキ

第二　公正證書又ハ裁判上追認アリタル私署證書ニシテ公吏ノ原本中ニ藏メタルモノヽ寫ヲ當事者ノ要求ニ因リ其相手方ノ面前ニテ其公吏ノ作リタルキ

第三　公吏カ裁判所ノ命ニ依リテ其寫ヲ作リタルキ

第四　右三箇ノ場合ノ外公吏ノ作リシ寫カ異議ヲ受ケスシテ其日附ヨリ二十个年ヲ經過シタルキ

寫ニハ左ノ諸件ヲ附記スルヿヲ要ス

右第一ノ場合ニ於テハ其寫ハ正式謄本タルヿ

第二ノ場合ニ於テハ當事者ノ面前ニテ作リタルヿ

第三ノ場合ニ於テハ裁判所ノ命ニ依リテ作リタルヿ

總テノ場合ニ於テ其寫ヲ正本ト校合シタル旨又ハ其寫ノ正本ニ符合スル旨ヲ之ニ附記スルヿヲ要ス

第六十二條　前條ニ記載シタル四箇ノ場合ノ外ハ公吏ノ作リタル證書ノ寫ハ書面ニ因ル證據端緒ノ用ヲ爲スノミ

第六十三條　公吏ノ作リタル寫ノ複寫ハ人證ヲ許ス可キ場合ニ限リ單純ナル參考書ノ用ヲ爲スノミ

然レモ公正證書ノ謄本ヲ登記又ハ記入ノ公簿ニ寫シ又ハ附記シタルトキハ其寫又ハ附記ハ書面ニ因ル證據端緒ナリ

裁判上追認アリタル私署證書ノ正本ノ右ニ同シキ寫又ハ附記ハ亦書面ニ因ル證據端緒ノ効力ノミヲ有ス

寫カ全文ノモノニシテ且異議ヲ受クル「無ク其日附ヨリ二十个年ヲ經過シタルトキハ其寫ハ第六十一條第四號ニ從ヒテ完全ノ證據トス

第七節　證人ノ陳述

第六十四條　物權又ハ人權ヲ創設シ、移轉シ、變更シ又ハ消滅セシムル性質アル總テノ所爲ニ付テハ其所爲ヨリ各當事者又ハ其一方ノ爲メニ生スル利益カ當時五十圓ノ價額ヲ超過スルトキハ公正證書又ハ私署證書ヲ作ルヿヲ要ス

人證ハ右ノ價額ヲ超過セサルトキ又ハ法律上明示若クハ默示ニテ例外ト爲シタルトキニ非サレハ裁判所之ヲ受理セス

第六十五條　雙務契約ニ於ケル證書ノ必要ハ最高ナル權利ノ價額ニ依ル

然レモ財產取得編第百二十四條ノ明文ニ從ヒテ無形人ノ性質ヲ有スル會社ニ於テハ其關係アル利益ノ評價ハ會社資本ノ全額ニ付キ之ヲ爲ス

第六十六條　請求ノ目的カ金額ニ非サル場合ニ於テ被告カ爭ノ價額五十圓ヲ超過スル旨ヲ陳述シテ人證ニ異議ヲ申立ツルトキハ裁判所ハ訴訟ノ目的ニ從ヒ又ハ鑑定ニ從ヒテ豫メ假ノ評價ヲ爲ス

第六十七條　書面ヲ作リタル場合ニ於テハ書面ニ反スル事項

若クハ書面外ノ事項ヲ證スル爲メ又ハ書面ノ意義ヲ變更ス可キ樣其錄製ノ際若クハ其前後ニ申述シタルモノヲ證スル爲メニハ縱令五十圓ヨリ少ナキ利益ニ關スルモ人證ヲ許サス

此禁止ハ辨濟、免除、更改其他ノ義務消滅ノ原因ヲ證スル爲メ又ハ書面ヲ以テ證シタル權利ノ日後ノ變更ヲ證スル爲メ上ニ定メタル制限內ニ於ケル人證ヲ妨ケス

總テノ場合ニ於テ主張セラレタル事實ノ日附及ヒ場所又ハ履行ノ爲メニ定メタル時期及ヒ場所ノ脫漏ハ人證ヲ以テ之ヲ補足スルヿヲ得但此事ヨリ生スル利益ヲ主タル利益ニ加ヘテ價額五十圓ヲ超過セサルキニ限ル

第六十八條　爭ノ利益カ五十圓ヲ超過スル場合ニ於テハ原告ハ縱令其以下ノ數額ニ請求ヲ減スルモ證人ヲ以テ之ヲ證スルヿヲ得ス

五十圓ヲ超過セサル價額ノ請求カ此數額ヲ超過シタル價額ノ殘餘ナルキモ亦同シ

第六十九條　前條ニ規定シタル二箇ノ場合ニ於テ證人訊問ニ因リ最初五十圓ヲ超過シタル利益ナルヿヲ發見シタルキハ人證ヲ許シタル裁判所ハ之ヲ取消スヿヲ要ス

此他證人訊問ニ因リ法律上之ヲ許サヽル事情ヲ發見シタル場合ニ於テモ亦同シ

第七十條　前記ノ規定ハ塡補利息又ハ過怠約款ヲ加フルカ爲メニ五十圓ノ額ヲ超過スル場合ニ於テ原告カ證人ヲ以テ其主タル債權ヲ證スル爲メ此從タル債權ヲ拋棄シ得ルノ妨ト爲ラス

右ノ超過カ遲延利息又ハ要約セサル損害賠償ノミヨリ生ス

ルキハ全部ニ付キ人證ヲ許ス

第七十一條　當事者ノ一方カ他ノ一方ニ對シテ數箇ノ權利ヲ利唱シ之ヲ併合スレハ五十圓ノ價額ヲ超過スルキハ此權利ヲ併合シ證人ヲ以テ之ヲ證スルヿヲ得ス但此權利カ相異ナル原因ヨリ生スルキハ此限ニ在ラス

第七十二條　書面ニ依リ全ク證セラレスシテ人證ノ許サル可キ數箇ノ請求ヲ爲スヿヲ得ヘキ者ハ其原因ノ如何ニ拘ハラス一箇ノ訴狀ニ其數箇ノ請求ヲ併合スルヿヲ要ス但其請求カ總テ滿期ノモノニシテ同一裁判所ノ管轄ニ屬スルモノタルキニ限ル

右ノ手續ヲ爲サヽルニ於テハ最早其脫漏シタル請求ヲ證人ヲ以テ證スルヿヲ得ス

第七十三條　左ノ場合ニ於テハ爭ノ價額ノ如何ニ拘ハラス又書面外ノ事項又ハ書面ニ反スル事項ヲ證セントスルキト雖モ人證ヲ許ス

第一　書面ニ因ル證據端緒ノ存スルキ

證據端緒トハ之ヲ以テ對抗セラルヽ人又ハ其人ヲ代表シタル者ヨリ出テタル總テノ書面ニシテ主張シタル事柄ヲ實ラシクスルモノヲ謂フ

第二　債權者カ不可抗力ニ因リ又ハ自己ノ過失若クハ懈怠ニ歸ス可カラサル意外ノ事ニ因リテ其證書ヲ失ヒタルヿヲ證スルキ

第三　主張シタル事柄ノ有リタル當時原告カ書證ヲ得ル能ハサリシキ

第七十四條　前條第三號ノ例外ハ殊ニ左ノ場合ニ之ヲ適用スル財產取得編第二百二十六條及ヒ第二百二十七條第一項ニ規

定シタル急迫寄託

事變、不期ノ危險又ハ急迫ナル必要ノ場合ニ於テ負擔シタル義務

合意外ノ原因ヲ有スル義務

然レモ此末ノ場合ニ於テ不當ノ利得、不正ノ損害又ハ法律ノ規定ヨリ生シタリト主張スル義務カ書面ヲ以テ證ス可キ性質ノモノタル權利行爲ヲ豫想セシムルキハ豫メ此證據ヲ供スルヿヲ要ス

第七十五條　法律カ人證ヲ許ス場合ノ外人證ヲ爭フニ利益ヲ有スル當事者カ人證ニ依リテ證據ヲ擧クルヿヲ承諾スルキハ裁判所ハ人證ヲ拒絶シ又之ヲ許可スルヿヲ得

第七十六條　判事ハ證人ノ證據ニ因リテ拘束セラレス其心證ニ從ヒテ判決ス

第八節　世評

第七十七條　法律上特ニ世評ニ因ル證據ヲ許ス場合ノ外或ル事實カ顯著ナルキ法律カ其規定ヲ此事實ニ適用ス可キヿヲ定メタル各箇ノ場合ニ於テハ此證ヲ用ユルヿヲ得

世評ニ因ル證據ニ於テハ證人ハ事實ニ付キ直接ニ自ラ知ラサルモ公然顯著ナルニ因リテ知リタル所ノモノヲ陳述スルヿヲ得

第三章　間接證據

第七十八條　間接證據ナル推定ハ法律カ直接證據ナキ場合ニ於テ知レタル事實ヨリ知レサル事實ニ自ラ推及シ又ハ裁判官ノ明識ト思慮トニ委ヌル結果ナリ

右第一ノ推定ヲ法律上ノ推定ト謂ヒ第二ノ推定ヲ事實ノ推定ト謂フ

第一節　法律上ノ推定

第七十九條　法律上ノ推定ニハ其證據力ト其原因トニ從ヒテ左ノ區別アリ

第一　完全ニシテ公益ニ關スルモノ

第二　完全ニシテ私益ニ關スルモノ

第三　單純ナルモノ

第一欵　公益ニ關スル完全ナル法律上ノ推定

第八十條　公益ニ關スル完全ナル法律上ノ推定ハ法律ノ明示シテ定メタル場合及ヒ方法ニ從フニ非サレハ反對ノ證據ヲ許サス此推定ハ左ノ如シ

第一　既判力

第二　取得又ハ免責ノ時効

第八十一條　既判力ハ判決主文ノミニ存ス

第八十二條　既判力ハ眞正ト推定セラル

然レモ確定ト爲ラサル判決ハ民事訴訟法ニ定メタル方式及ヒ期間ニ於テ之ヲ攻擊スルヿヲ得

第八十三條　判決ノ確定ト爲リタルトキ同一ノ爭ヲ再ヒ訴フルニ於テハ其爭ハ既判力ニ依リテ之ヲ斥ク

第八十四條　既判力ノ抗辯ヲ以テ新請求ニ對抗スルヿヲ得ルニハ其請求カ舊請求ニ比較シテ左ノ諸件アルヿヲ要ス

第一　目的又ハ權利ノ同一ナルヿ

第二　權利ノ原因ノ同一ナルヿ

第三　原告、被告ノ權利上ノ資格ノ同一ナルヿ

第八十五條　新請求ノ目的カ數量ニ付テノミ舊請求ノ目的ト異ナリタルトキハ新請求ノ目的ハ舊請求ニ包含シタルモノト看做ス但舊請求ヲ裁判セシ判事カ新請求ノ數量ヲ正當トス

ルニ於テハ之ヲ許與スルノ權力ヲ有セシキニ限ル

第八十六條　舊請求カ合意又ハ遺言ノ銷除、廢罷又ハ解除ヲ目的トシタルキハ其請求ノ際成立シタルモ原告ノ知リテ申立テサリシ他ノ原因ハ原告之ヲ抛棄シタリト推定セラレ更ニ之ヲ新請求ノ原因トシテ用ユルヿヲ得ス

方式ノ瑕疵ニ基因シタル行爲ヲ無効トスル舊請求中ニ申立テサリシ他ノ方式ノ瑕疵ニ付テモ亦同シ

本條ノ適用ニ於テ銷除ノ訴ノ爲メニハ承諾ノ各種ノ瑕疵及ヒ各種ノ無能力ヲ同性質ノ原因ト看做シ又解除ノ訴ノ爲メニハ合意不履行ノ各種ノ場合ヲ同性質ノ原因ト看做ス

第八十七條　當事者カ或ハ自身ニテ同一ノ資格ヲ以テ既ニ舊訴訟ニ出テタルキ或ハ舊訴訟ニ於テ其前主若クハ代理人ニ因リテ代表セラレタルキ或ハ利害關係人ノ結合カ暗ニ相互

代理タルキハ當事者ノ權利上ノ資格ハ同一ナリトス

第八十八條　刑事裁判所カ犯罪ノ所爲ノ爲メニ要求セシ民事上ノ賠償ニ付キ判決シタル場合ノ外尚ホ重罪、輕罪又ハ違警罪ノ判決ハ犯罪ニ附着スル民事上ノ利益ニ付キ既判力ヲ有ス但犯罪所爲ノ眞實、其犯罪ノ性質及ヒ被告人ノ罪責ニ付テノ裁判ニ關スルモノニ限ル

第二款　私益ニ關スル完全ナル法律上ノ推定

第八十九條　法律上ノ推定ハ法律カ或ル行爲ヲ其規定ニ觸ルヽモノト推定シ定マリタル資格ノ人ノ爲メ之ヲ取消ス場合ニ於テハ私益ニ關スル完全ノモノタリ

此犯則ノ法律上ノ推定ハ法律ノ明示シテ定メタル場合及ヒ方法ニ從フニ非サレハ反對ノ證據ヲ許サス

然レモ此推定ハ口頭自白ヲ以テ何時ニテモ之ヲ覆ヘスヿヲ

得

第三欵　單純ナル法律上ノ推定

第九十條　前記ノ法律上ノ推定ニ非サルモノハ單純ナル法律上ノ推定ナリ此推定ニ付テハ法律カ反對ノ證據ヲ明許セサルヰト雖モ總テ之ヲ許ス

右反對ノ證據ハ前章ニ規定シタル如ク法式及ヒ條件ヲ以テスルニ非サレハ之ヲ擧クルヿヲ得ス

又單純ナル法律上ノ推定ハ次條ノ場合ニ於テハ事實ノ推定ヲ以テ之ヲ駁擊スルヿヲ得

第二節　事實ノ推定

第九十一條　法律カ裁判所ニ其決定ノ元素ヲ訴訟ノ事情ニ就キ採取スルヿヲ許ス特別ナル場合ノ外尚ホ裁判所ハ人證ヲ許ス可キ場合ニ於テハ何等ノ直接ノ證據ヲモ擧ケサルヰト雖モ事情ヨリ生スル心證ニ從ヒテ爭ヲ決スルヿヲ得

第二部　時効

第一章　時効ノ性質及ヒ適用

第九十二條　時効ハ時ノ効力ト法律ニ定メタル其他ノ條件トヲ以テスル取得又ハ免責ノ法律上ノ推定ナリ但動産ノ瞬間時効ニ關シ第百四十七條以下ノ規定ヲ妨ケス

第九十三條　正當ナル取得又ハ免責ノ推定ハ完全ニシテ公ノ秩序ニ關スルモノトス此推定ハ第百六十四條ニ規定シタル如キ法律ノ定メタル場合及ヒ方法ニ從フニ非サレハ反對ノ證據ヲ許サス

第九十四條　取得時効ノ効力ハ占有ノ有益ニ始マリタル日ニ遡ル

免責時効ノ効力ハ債權者カ其權利ヲ第百二十八條以下ニ記載シタル區別ニ從ヒテ行フヿヲ得ヘカリシ日ニ遡ル

第九十五條　或ル訴權ノ行使ノ爲メ法律ニ定メタル期間ハ其訴權ノ性質ニ因リテ取得時効又ハ免責時効ノ一般ノ規則ニ從フ但法律カ明示又ハ默示ニテ例外ヲ設ケタル場合ハ此限ニ在ラス

第九十六條　時効ハ總テノ人ヨリ之ヲ援用スルヿヲ得又時効ハ總テノ人ニ對シテ進行ス但法律ニ依リ時効停止ノ利益ヲ受クル人ニ對シテハ此限ニ在ラス

第九十七條　總テ融通物ハ時効ニ罹ルヿヲ得但法律上之ニ異ナル規定ヲ設ケタルモノハ此限ニ在ラス

不融通物ハ時効ニ罹ルヿヲ得ス

第九十八條　自己ノ財産ニ付キ又ハ他人ニ對シテ行フヿヲ得ル單純ナル權能ハ幾許ノ時期間之ヲ行ハサルモ爲メニ喪失セス但法律、合意又ハ遺言ニ於テ之ニ異ナル定ヲ設ケタル場合ハ此限ニ在ラス

第九十九條　判事ハ職權ヲ以テ時効ヨリ生スル訴又ハ抗辯ノ方法ヲ補足スルヿヲ得ス時効ハ其條件ノ成就シタルカ爲メ利益ヲ受クル者ヨリ之ヲ援用スルヿヲ要ス

第百條　時効ヲ援用スルニ利益ヲ有スル當事者ノ總テノ承繼人ハ或ハ原告ト爲リ或ハ被告ト爲リ其當事者ノ權ニ基キテ時効ヲ援用スルヿヲ得

債權者ハ財産編第三百三十九條ニ從ヒテ右ト同一ノ權利ヲ有ス

第百一條　時効ハ訴訟中何時ニテモ之ヲ援用スルヿヲ得又控訴ニ於テモ始メテ之ヲ援用スルヿヲ得然レモ上告ニ於テハ之ヲ援用スルヿヲ得ス

第百二條　年又ハ月ニ依リテ成就ス可キ時効ハ曆ニ從ヒテ之

ヲ算ス

日ニ依リテ成就ス可キ時効ハ滿二十四時間ヲ一日ト爲シテ之ヲ算ス

時効ノ進行ノ始マリタル日又ハ其中斷若クハ停止ノ後再ヒ進行ノ始マリタル日ハ之ヲ算セス

最後ノ日ハ全ク經過スルヿヲ要ス

第二章　時効ノ拋棄

第百三條　時効ハ豫メ之ヲ拋棄スルヿヲ得ス但第百二十二條第二項ニ記スル如ク占有者カ將來ニ向ヒテ其占有ノ容假ヲ認ムルノ權利ニ妨ナシ

成就シタル時効ハ之ヲ拋棄スルヿヲ得又其進行中ト雖モ既ニ經過シタル時期ノ利益ハ之ヲ拋棄スルヿヲ得

此場合ニ於テハ第百二十條以下ニ記載セル相手方ノ權利ヲ追認シタル場合ニ於ケルト同シク時効ハ中斷ス

第百四條　拋棄ハ默示タルヿヲ得ルト雖モ明カニ事情ヨリ顯ハルヽヿヲ要ス

第百五條　成就シタル時効ヲ有効ニ拋棄スルニハ取得シタリト推定セラルヽ權利ヲ讓渡シ又ハ消滅シタリト推定セラルヽ義務ヲ負擔スルノ能力アルヿヲ要ス

第百六條　債權者ハ其權利ヲ詐害シテ債務者ノ爲シタル時効ノ拋棄ニ對シテハ財産編第三百四十條以下ニ定メタル條件及ヒ方法ニ從ヒ自己ノ名ヲ以テ之ヲ攻擊スルヿヲ得

第三章　時効ノ中斷

第百七條　經過シタル時期ノ利益カ下ニ記シタル原因ノ一ニ由リテ消滅スルヿハ時効ハ中斷ス

中斷シタル時効ハ中斷ノ原因ノ止ミタル時ヨリ更ニ進行ス

第百八條　時効ノ中斷ハ自然ノモノ有リ法定ノモノ有リ

自然ノ中斷ハ取得時効ニ關シテノミ生ス

法定ノ中斷ハ二種ノ時効ニ共通ナリ

第百九條　動産又ハ不動産ノ占有者又ハ動産ノ包括若クハ特定動産ノ占有者カ眞ノ所有者又ハ第三者ノ所爲ニ因リテ一个年以上其占有ヲ奪ハレタルトキハ自然ノ中斷アリ

占有ヲ取戻シタルトキハ時効ハ更ニ進行ス

若シ不可抗力ニ因リテ占有ヲ奪ハレタルトキハ自然ノ中斷ナシ

第百十條　自然ノ中斷ハ各利害關係人ノ爲メニ其効ヲ生ス

第百十一條　占有者カ或ル時間任意ニテ其占有ヲ止メタルトキハ其占有不繼續ノ効力ハ第百四十一條ニ於テ之ヲ規定ス

第百十二條　法定ノ中斷ハ左ノ諸件ヨリ生ス

第一　裁判上ノ請求

第二　勸解上ノ召喚又ハ任意出席

第三　執行文提示又ハ催告

第四　差押

第五　任意ノ追認

右ノ手續又ハ追認ノ行爲カ時効ノ爲メ害ヲ受クル者ノ權利ニ關係スルヿヲ要ス

第百十三條　本訴ト附帶訴ト反訴トヲ問ハス裁判上ノ請求ハ時効ヲ中斷ス但其請求カ方式ニ於テ無効タリ又ハ管轄違ノ裁判所ニ之ヲ爲シタルトキモ亦同シ

然レトモ右但書ノ場合ニ於テ中斷ハ初ノ請求ヲ棄却セシ判決アリタル時ヨリ二个月内ニ更ニ訴ノ提起ヲ爲サヽルニ於テハ之ヲ不成立ト看做ス

第百十四條　中斷ハ左ノ場合ニ於テモ亦之ヲ不成立ト看做ス

第一　請求カ其基本ニ於テ棄却セラレタルトキ

第二　原告カ取下ヲ爲シタルトキ

第三　訴訟カ民事訴訟法ニ定メタル時間其手續ヲ休止シタルトキ

第百十五條　裁判上ノ請求ヨリ生スル中斷ハ訴訟ノ提起ヨリ其判決ノ確定ト爲ルマテ繼續ス

第百十六條　勸解上ノ召喚又ハ任意出席ニ因ル時効ノ中斷ハ主タル請求ハ勿論其反對ノ請求ヨリモ生ス

召喚ノ無効ハ方式ノ瑕疵ニ因ルモ管轄違ニ因ルモ中斷ヲ妨ケス但初ノ召喚ノ無効ト爲リタルヨリ一个月內ニ更ニ合式ノ召喚ヲ爲スヿヲ要ス

合式ノ召喚ノ上勸解不調ノ場合及ヒ被告ノ闕席ノ場合ニ於テ中斷ハ一个月內ニ裁判上ノ請求ヲ爲サヽルトキハ之ヲ不成立ト看做ス

第百十七條　執行文提示ヨリ生スル中斷ハ方式ノ瑕疵ニ因リテ其提示ノ無効ナルトキト雖モ尙ホ成立ス但催告ヨリ生スル中斷ノ爲メ下ニ定メタル條件ヲ履行スルヿヲ要ス

第百十八條　義務履行ノ催告ハ義務ノ目的及ヒ原因ヲ明カニ指示シ且六个月內ニ裁判上又ハ勸解上ノ請求ヲ爲シタルトキニ非サレハ時効ヲ中斷セス

債權擔保編第二百七十四條ニ記載シタル如ク抵當不動產ヲ委棄スルヤ債務ヲ辨濟スルヤニ付キ其第三所持者ニ爲シタル催告ハ之ニ對シテ抵當消滅ノ時効ヲ中斷ス

第百十九條　差押ヨリ生スル中斷ハ其差押ノ手續カ合式ニ終結マテ繼續シタルニ非サレハ其効力ヲ存續セス

假差押ハ裁判所ノ定メタル期間内ニ裁判上ノ請求ヲ爲シタルニ非サレハ時効ヲ中斷セス

時効ノ利益ヲ受クル者ニ對シテ差押ヲ爲サヽルキハ其差押ハ此者ニ告知シタル後ニ非サレハ之ニ對シテ中斷ノ効力ヲ有セス

第百二十條　任意ノ追認ヨリ生スル時効ノ中斷ハ裁判上ヨリ又ハ口頭タルト書面タルトヲ問ハス裁判外ノ行爲ヨリ生スルヿヲ得

裁判上ノ追認ハ自發ナルヿ有リ又ハ判事ノ訊問ヨリ生スルヿ有リ

第百二十一條　追認ハ明示又ハ默示ナルヿヲ得

占有者カ占有物ニ關スル果實又ハ賠償ノ要求ニ承服スルキ又ハ之ニ反シテ占有者カ物ニ付キ爲シタル必要若クハ有益ノ費用ノ爲メ賠償ヲ要求スルキハ殊ニ取得時効ニ對スル默示ノ追認アリトス

債務者カ利息又ハ債務ノ辨濟ノ請求ニ承服スルキ又ハ之ニ反シテ債務者カ提供ヲ爲シ若クハ恩惠期間ノ請求ヲ爲スキハ殊ニ免責時効ニ對スル默示ノ追認アリトス

第百二十二條　眞所有者ノ權利ヲ追認シタル占有者ハ新時効ヲ再ヒ始ムルノ權利ヲ失ハス然レモ占有者ハ最早其以前ノ善意ノ利益ヲ援用スルヿヲ得ス

若シ其占有者カ容假ノ占有者ト爲リタルキハ將來ニ向ヒテ時効ノ利益ヲ失フ但財産編第百八十六條第二項及ヒ第三項ノ場合ノ適用ヲ妨ケス

第百二十三條　追認ニ因リテ中斷シタル免責時効ハ即時更ニ進行ス然レモ其時効ハ最初短期ノモノタリシキト雖モ將來

ニ向ヒテハ長期時効ノ期間ニ從フ

第百二十四條　時効ヲ中斷スル追認ハ自己ノ財産ヲ管理スルノ能力又ハ時効ニ罹ルヿ有ル可キ財産ヲ他人ノ爲メニ管理スルノ權力ヲ有スル者ニ於テ之ヲ爲シタルトキハ有効ナリ

然レモ婦、無能力者又ハ委任者ノ利益ニ於テ不動産ノ取得時効ヲ中斷スル爲メ夫、後見人又ハ代理人ノ爲シタル追認ハ不動産ノ請求ニ承服スル特別權力アルニ非サレハ有効ナラス

第百二十五條　時効ヲ中斷スル追認ノ所爲ニ付キ爭アルトキハ通常ノ證據方法ヲ以テ之ヲ證スルヿヲ得

第百二十六條　保證、連帶及ヒ不可分ノ場合ニ於テ各利害關係人ニ對スル追認其他ノ方法ニ因ル時効中斷ノ効力ハ債權擔保編第二十七條、第六十條、第六十一條、第八十二條及ヒ第九十一條ニ於テ之ヲ規定ス

第四章　時効ノ停止

第百二十七條　權利ノ行使カ確定若クハ不確定ノ期限ニ服シ又ハ其發生カ停止ノ條件ニ繫カルトキハ其期限又ハ條件ノ到來後ニ非サレハ時効ハ進行ヲ始メス

第百二十八條　時効ハ物權又ハ人權ニシテ其廣狹又ハ行使カ相續ノ發開ニ繫カルモノニ對シテハ其發開後ニ非サレハ進行ヲ始メス

第百二十九條　遺言又ハ前主ノ合意ニ對シ相續人ニ屬スル銷除訴權ノ時効ハ其遺言又ハ合意ヲ相續人ニ對シテ援用シ又ハ其相續人ヲ害スル權利行使ノ基礎トシテ用ヰタル後ニ非サレハ進行ヲ始メス

第百三十條　前記ノ場合ニ於テ時効ハ第三所持者ニ對シテ停止セス但所有權ノ取得時効又ハ抵當ノ免責時効ヲ中斷セン

ト欲スル利害關係人ニ於テ自己ノ權利ノ追認證書ヲ得ント請求スルヿ又ハ裁判上其權利ヲ單ニ追認セシムルヿヲ妨ケス

第百三十一條　時効カ其進行中ニ停止セラルヽキハ既ニ經過シタル時間ハ其時効ノ更ニ進行ヲ始ムル時ニ之ヲ通算ス

第百三十二條　時効ハ法律ノ定メタル塲合及ヒ法律ノ定メタル人ノ利益ニ於ケルニ非サレハ停止セス

第百三十三條　期間五个年以下ノ時効ハ成年者ニ對スル如ク未成年者及ヒ禁治産者ニ對シテ進行ス但後見人カ其行フ可キ權利ヲ覺知セサルヿニ付キ正當ノ原因ヲ有セサル塲合ニ於テハ此等ノ者ヨリ其後見人ニ對スル求償權ヲ妨ケス

五个年ヲ超ユル時効ニ關シテ成規上ノ期間カ未成年中又ハ禁治産中ニ經過シタルキハ成年ト爲リタル未成年者、能力ヲ回復シタル禁治産者又ハ此等ノ者ノ成年ノ相續人ヲシテ其權利ノ効用ヲ致サシムル爲メ之ニ一个年ノ補足期間ヲ付與ス

若シ權利カ無能力者ニ移リタル當時ニ於テ尚ホ進行ス可キ殘期カ一个年以下ナルキハ補足期間ハ其殘期ノ繼續期間ノミヲ有ス

第百三十四條　時効ハ婦ニ對シ第三者ノ利益ニ於テ進行ス但夫カ婦ノ爲メニ管理スル財産ニ關シ其夫ノ方ニ懈怠アル塲合ニ於テハ婦ヨリ夫ニ對スル求償權ヲ妨ケス

然レモ時効ノ成規上ノ期間カ結婚中ニ成就シタルキハ婦又ハ其相續人ハ法律ノ規定シタル塲合ニ於テハ解婚ノ後未成年者及ヒ禁治産者ト同一ノ補足期間ヲ享有ス

第百三十五條　前二條ノ規定ハ無能力者自身ニテ爲シタル行

爲ノ銷除訴權ノ時効停止ニ關シ財産編第五百四十四條及ヒ第五百四十五條ニ定メタルモノヲ妨ケス

第百三十六條　配偶者ノ一人ヨリ他ノ一人ニ對シテ行フ可キ權利ニ關シテハ結婚中ト雖モ時効ハ進行ス

然レモ時効カ結婚中ニ成就シタルトキハ時効ノ爲メ害ヲ受クル配偶者ハ第百三十三條ニ從ヒ其物權又ハ人權ヲ行フヿヲ得

第百三十七條　時効ハ他人ノ財産ノ管理人ト其管理ヲ受クル者トノ間ニ於テ其保存スルヿヲ任セラレタル權利ニ付テハ管理人ニ對シテ停止ス

第百三十八條　上ニ定メタル場合ニ於テ時効ノ期間ノ滿了スル時ニ當リ有權者カ交通ノ塞カリタルニ因リ又ハ地方ノ裁判事務ノ停止セラレタルニ因リテ其權利ノ効用ヲ致サシメ

又ハ時効ヲ中斷スル爲メ手續ヲ爲スヿ能ハサリシトキハ有權者其妨碍ノ止ム後直チニ請求ヲ爲スニ於テハ其失權ヲ免カルヽヿヲ得

右ノ規定ハ陸海軍人カ内國又ハ外國ノ戰亂ノ時ニ於テ服役ノ爲メ其權利ヲ行フヿヲ妨ケラレタル場合ニ於テハ其利益ノ爲メ之ヲ適用ス

第百三十九條　物權又ハ人權ノ不可分ヨリ生スル時効ノ停止ハ財産編第二百九十一條、第四百四十七條及ヒ債權擔保編第九十二條第二項ニ於テ之ヲ規定ス

第五章　不動産ノ取得時効

第百四十條　不動産ノ取得時効ニ付テハ所有者ノ名義ニテ占有シ其占有ハ繼續シテ中斷ナク且平穩、公顯ニシテ下ニ定メタル繼續期間アルヿヲ要ス

財産編第百八十四條及ヒ第百八十六條ニ定メタル如キ强暴、隱密又ハ容假ノ占有ハ時効ヲ生セス

第百四十一條　占有者カ時効ニ因リテ取得セントスル物ニ付キ或ル長キ時間所有者ノ行爲ヲ爲スヿヲ任意ニテ止メタルキハ其占有ハ不繼續ニシテ時効ヲ生セス

占有者カ再ヒ所有者ノ行爲ヲ爲スキハ其以前ノ占有ノ時間ハ占有者ノ爲メニ之ヲ算セス

第百四十二條　若シ占有カ上ニ定メタル條件ノ外財産編第百八十二條ニ記載シタル如キ正名義ニ基因シ且財産編第百八十三條ニ從ヒテ善意ナルキハ占有者ハ不動産ノ所在地ト時効ノ爲メ害ヲ受クル者ノ住所又ハ居所トノ間ノ距離ヲ區別セス十五个年ヲ以テ時効ヲ取得ス

第百四十三條　方式上無効タリ又ハ裁判上取消サレタル名義ハ時効ノ爲メニ有益ナラス

第百四十四條　占有者カ正名義ヲ證スルヿヲ得ス又ハ之ヲ證スルモ財産編第百八十八條ニ規定シタル如ク其惡意カ證セラルヽキハ取得時効ノ期間ハ三十个年トス

第百四十五條　性質上登記ヲ爲ス可キ正名義ニ基因シタル時効ハ其名義ノ證書ヲ登記シタル後ニ非サレハ之ヲ算セス

第百四十六條　前主ノ占有ヲ其相續人及ヒ包括若クハ特定ノ承繼人ノ占有ニ併合シ又ハ繼續スルヿハ財産編第百九十三條ニ於テ之ヲ規定ス

第六章　動産ノ取得時効

第百四十七條　正名義且善意ニテ有體動産物ノ占有ヲ取得スル者ハ即時ニ其所有者ト爲ル

此場合ニ於テ反對カ證セラレサルキハ占有者ハ正名義ニテ

占有スルモノトノ推定ヲ受ク

第百四十八條　動産物ノ占有者カ正名義ヲ有シ且善意ナル場合ニ於テモ其物カ所有者ノ盗取セラレ詐取セラレ又ハ遺失シタルモノナルトキハ其所有者ハ盗難、詐取又ハ遺失ノ時ヨリ二个年間ハ占有者ニ對シテ其物ノ回復ヲ請求スルヿヲ得但占有者カ其物ヲ有償名義ニテ受ケタルトキハ其讓渡人ニ對スル求償ヲ妨ケス

背信ニ因リテ隱竊シタル物ニハ本條ヲ適用セスシテ前條ノ規定ニ從フ

第百四十九條　盗取セラレ詐取セラレ又ハ遺失シタル物ヲ競賣又ハ公ノ市場ニ於テ又ハ此類ノ物ノ商人若クハ古物商人ヨリ善意ニテ買受ケタル者アルトキハ所有者ハ其買受代價ヲ辨償スルニ非サレハ回復ヲ爲スヿヲ得ス

此場合ニ於テハ右ノ代價ニ付キ所有者ハ賣主ニ對シ又賣主ハ讓渡人ニ對シテ求償權ヲ有シ終ニ盗取者、詐欺者又ハ拾得者ニ遡ル

第百五十條　無記名債權證書ヲ盗取セラレ詐取セラレ又ハ遺失シタル場合ニ於テ其證書回復ノ期間及ヒ條件ハ特別ノ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第百五十一條　前記ノ場合ニ於テ回復者カ占有ノ無名義タリ又ハ惡意タルヿヲ證スルトキハ時効ハ三十个年ヲ經過スルニ非サレハ成就セス

第百五十二條　前記ノ規定ハ用方ニ因リテ不動産ト爲リタル動産カ其附着シタル不動産ヨリ分離セラレタル場合ニ於テハ其動産ニ之ヲ適用ス

前記ノ規定ハ記名債權又ハ文學、技術若クハ工藝ノ所有權ノ

如キ無體動物ニモ動産ノ包括ニモ之ヲ適用セス但此等ノ物ニ關スル時効ノ期間ハ第百四十條以下ニ記載シタル區別ニ從ヒ不動産ニ關スルモノト同一ナリ

第七章　免責時効

第百五十三條　義務ノ免責時効ハ債權者カ其權利ヲ行フヿヲ得ヘキ時ヨリ三十个年間之ヲ行ハサルニ因リテ成就ス但法律上別段短キ期間ヲ定メ又ハ債權ヲ時効ニ罹ラサルモノト定メタルトキハ此限ニ在ラス

第百五十四條　債務ノ元本カ年賦ニテ辨濟ス可キモノタルトキハ利息ヲ包含スルト否トヲ問ハス時効ハ各年賦ノ要求期ニ達シタル時ヨリ各別ニ之ヲ算ス

第百五十五條　債權カ無期又ハ終身ノ年金權ナルトキト雖モ其時効ハ證書ノ日附ヨリ又ハ財産取得編第百九十八條ニ從ヒ債務者元本ヲ償還スルヲ得ヘキ時ヨリ三十个年ヲ以テ成就ス

然レトモ右ノ日附ヨリ二十八个年ノ後ニ至リ債權者ハ債務者ニ對シ時効ヲ中斷スル爲メ雙方ノ費用ヲ以テ其權利ノ追認證書ヲ得ント要求スルヿヲ得

若シ債務者右ノ要求ヲ拒絶シ債權者裁判上自己ノ權利ヲ追認セシムルノ必要アルトキハ其費用ハ全ク債務者ノ負擔タリ

第百五十六條　動産質又ハ不動産質ノ返還ヲ得ル爲メノ對人訴權ハ適法ナル方法ニ因リテ債務ノ消滅シタル後ニ非サレハ時効ニ罹ラス

第八章　特別ノ時効

第百五十七條　人ノ身分ニ關スル訴權ハ法律カ其行使ヲ特別ノ期間ニ繫カラシムル場合ニ非サレハ時効ニ罹ラス

第百五十八條　相續人又ハ包括名義ノ受遺者若クハ受贈者ノ分限ヲシテ効用ヲ致サシムル爲メノ遺産請求ノ訴權ハ相續人又ハ包括名義ノ受贈者若クハ受遺者ノ名義ニテ占有スル者ニ對シテハ相續發開ノ時ヨリ三十个年ヲ經過スルニ非サレハ時効ニ罹ラス

第百五十九條　免責時効ハ左ニ掲クル諸件ノ辨濟ノ訴權ニ對シテハ五个年トス

第一　明確ナル金額ノ塡補又ハ遲延ノ利息

第二　無期又ハ終身ノ年金權ノ年金

第三　養料又ハ恩給ノ一期ノ支拂金

第四　借家賃又ハ借地賃

第五　果實又ハ日用品ノ毎期ノ給與額

第六　教師、番頭、手代、使用人、僕婢、乳母ノ謝金又ハ給料ニシテ一个年毎ニ定メラレタルモノ

其他一般ニ一个年毎ニ又ハ更ニ短キ時期ヲ以テ定メタル金額又ハ有價物ニ係ル債務ニ付テモ亦同シ但其辨濟ノ方法如何ニ拘ハラス且下ニ規定シタル場合ハ此限ニ在ラス

第百六十條　時効ハ左ノ訴權ニ對シテハ三个年トス

第一　醫師、産婆、藥劑者ノ世話、治術及ヒ調劑ニ關スル其訴權

第二　前條第六號ニ指定シタル教師、使用人其他ノ者ノ謝金又ハ給料カ一个年ヨリ短ク一个月ヨリ長キ時期ヲ以テ定メラレタル場合ニ於テハ其訴權

第三　技師、工匠、測量師、製圖師ノ雇使ノ終ラサルヰト雖モ其經畫、意見及ヒ工事ニ關スル其訴權

第四　不動産ニ關スル築造、地均其他ノ工作ニ付テノ請負人ノ訴權

第百六十一條　公證人、辯護士、執達吏其他訴訟代人若クハ輔佐人カ職務ニ關シテ受ク可キモノニ付テノ其訴權ニ對スル時効ハ二个年トス

此場合ニ於テ時効ハ右各人ノ債權ヲ生セシメタル行爲又ハ訴訟ノ終了後ニ非サレハ進行ヲ始メス

然レトモ終了セサル事件ニ關シテハ右各人ハ五个年餘ニ遡ル行爲ノ爲メニ謝金ヲ要求スルヿヲ得ス

此規定ハ右各人カ其職務ノ爲メニ爲シタル立替金及ヒ支出金ニ之ヲ適用ス

第百六十二條　時効ハ左ノ訴權ニ對シテハ一个年トス

第一　非商人ニ爲シタル供給ニ關スル日用品、衣服其他動産物ノ卸賣商人又ハ小賣商人ノ訴權但商人又ハ工業人ニ爲シタル供給ト雖モ其者ノ商業又ハ工業ニ關セサル場合ニ於テハ亦同シ

第二　前記ノ區別ヲ以テ注文者ノ材料又ハ動産物ニ付キ仕事ヲ爲ス居職ノ職工又ハ製造人ノ訴權

第三　生徒又ハ習業者ノ教育、飲食及ヒ止宿ノ代料ニ關スル校長、塾主、師匠又ハ親方ノ訴權

第百六十三條　時効ハ左ノ訴權ニ對シテハ六个月トス

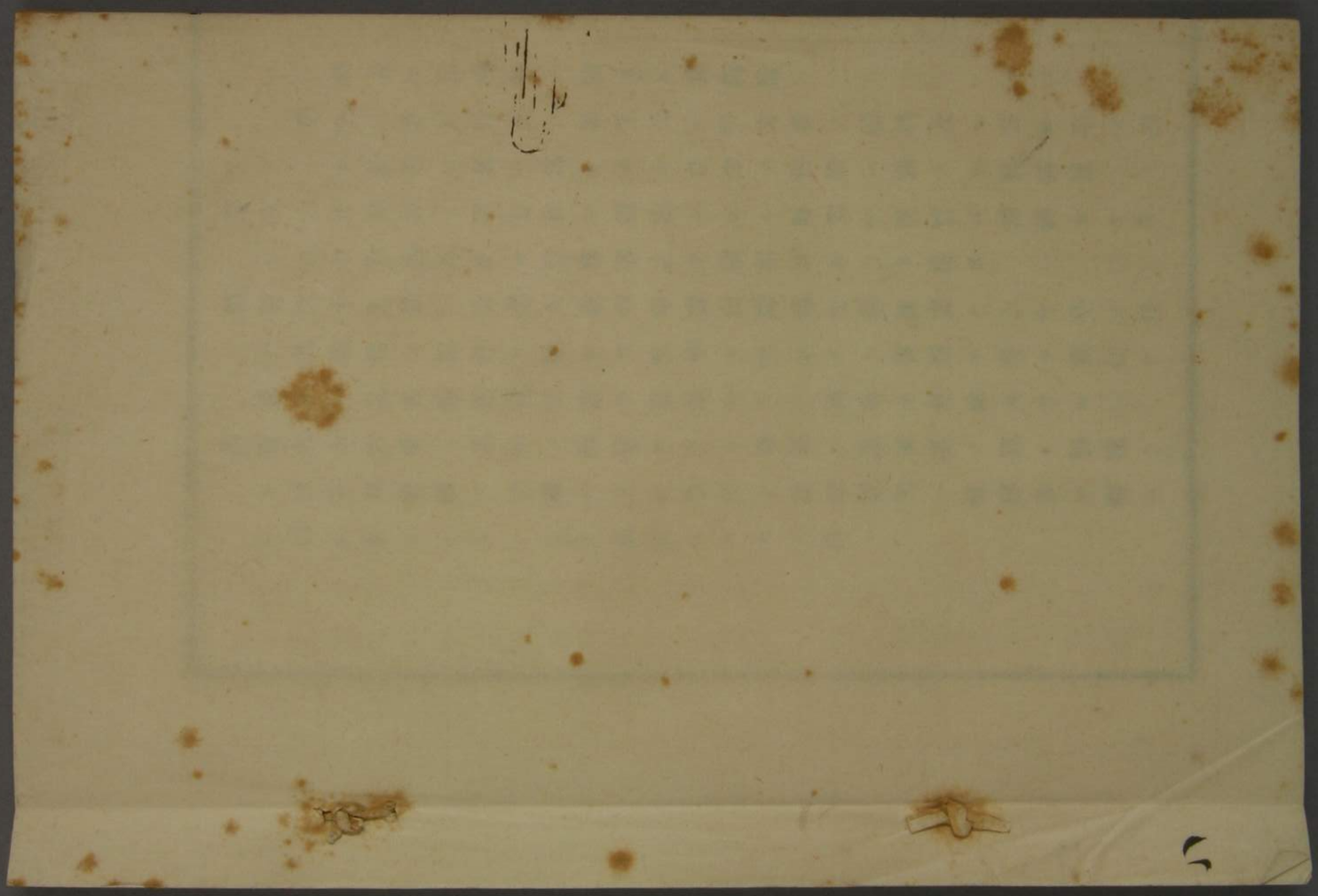
第一　第百五十九條第六號及ヒ第百六十條第二號ニ指定シタル教師、使用人、僕婢其他ノ者ノ謝金又ハ給料カ一个月又ハ更ニ短キ時期ヲ以テ定メラレタル場合ニ於テハ其訴權

第二　旅店又ハ料理店ノ主人ヨリ供給シタル宿泊料、飲食

料及ヒ消費物ニ關スル其訴權

第三　日雇、月雇ノ職工又ハ勞力者ノ給料及ヒ其仕事ニ際シ此等ノ者ノ爲シタル些少ノ供給ニ關スル其訴權

第百六十四條　前五條ニ規定シタル時効ハ現實ニ辨濟セサリシヿヲ自白シタル債務者之ヲ援用スルヿヲ得ス

第百六十五條　公證人、裁判所書記、辯護士、執達吏ハ三个年ノ後ハ其職務ノ事件ニ關シテ交付セラレタル書類ニ付キ責任ヲ免カレ其書類返還ノ證ヲ提示スルノ義務ヲ免除セラル

第百六十六條　本章ニ規定シタル時効ハ當事者ノ間ニ明確ナル計算書、數額ヲ記載シタル債務ノ追認書又ハ債務者ニ對スル判決書アルトキハ之ヲ適用スルヿヲ得ス